吸血鬼憚――白姫黒姫物語

朝夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
吸血鬼憚――白姫黒姫物語

【Ｎコード】
Ｎ１５００Ｚ

【作者名】
朝夜

【あらすじ】
とある大陸の片隅。
寂れた古城の片隅。
二人の吸血鬼が居ました。
片や，その容姿から“白姫”
片や，その容姿から“黒姫”と呼ばれて居ました。美しい少女達は気ままに世界を渡ります。

序章――塔の上の吸血鬼

／一

無数の蔦と荊に囲まれた重厚な造りの建物。古びた居城。
右端に存在する塔の最上階。
穏やかな陽射しが，気怠く差し込む窓辺。
古びた，然し元は品質が良かったのであろう椅子に，一人の少女が座っていた。
人形のように整った顔立ちと，紅玉のような澄んだ紅い瞳を持ち，シルクのような白く艶やかな髪を腰まで伸ばした美しい少女。
純白の衣装が陽射しを反射し幻想的に少女を写している。

「――」

静かな部屋を規則正しい小さな寝息が充たす。
そんな，たおやかな午後。静寂に包まれた部屋。それを不意に扉をノックする音が破った。

「アイボリー……って。あら」

静寂に包まれた部屋に入って来た少女は，アイボリーと呼ばれた白い少女に良く似ていた。
人形のように整った顔立ち。
然し，アイボリーとは対照的に瞳はルビーでなく，サファイア。
髪はシルクでなく烏の羽。纏う衣装と雰囲気も全てアイボリーと反転している。

「女の子が鍵も掛けずに一人でお昼寝なんて，無用心ね」

黒衣の少女――エボニー＝シュバルツ・リーデンは短く溜息を吐いた。

――が。

確かに扉に鍵は掛かっていなかった。

然しこの世界における他者の侵入を拒む術は，何も物理的な事だけでは無い。魔術にしろ錬金術にしろ，幾らでも方法は有る。

ましてや，アイボリー――アイボリー＝ヴァイス・リーデンは《真祖》と呼ばれる王族の吸血鬼の魂と知恵を継承している，魔術の使い手である。

扉や通路に幾千の高位の魔術が掛けられていたであろう事は，容易に想像出来た。

「ふふ……可愛い」

エボニーがウットリ，といったように微笑んだ。陽射しを受けながら無防備に眠るアイボリーは，十五，六才の容姿より幾分か幼く見える。“可愛い”と形容しても確かに違和感は無い。

「幾千の，時を経て尚，擦り減らぬ，幼き君の，愛おしさ故」

そんな，東の国で流行っているという詩を作りながら，エボニーはアイボリーに手を伸ばす。

エボニーのしなやかな指がアイボリーの頬に触れる。

「ん……ふっ……」

頬に伝わる圧力にアイボリーの息が乱れる。それを見てエボニーが悦に入りながら頬にふにふにと触れていると――

「ああ……柔らかい。――あ」

不意に，大気の魔力が震えた。エボニーの足元に魔術陣が現れ，次の瞬間には無数の鎖がエボニーを縛り上げていた。魔力が込められた鎖は容易に解けない。

然しエボニーは縛られた自分を見て，何故か嬉しそうに微笑んでいる。

「……。こんにちは，エボニー。おはよう。そんなところでどうしたんだい」

「そんな白々しい挨拶は良いわ。今日は拘束プレイ？」　エボニーの言葉にアイボリーは嫌そうな表情をした。

「今日は，とか言われても。丸で私が何時もそんな事を――というかどうやって部屋に入ったんだ？　エボニー」

言い終わるとアイボリーは，小さく欠伸をして，目の端に溜まった涙を払った。

「どうやって，って。鍵は掛かって無かったわよ？」

悪戯に微笑むエボニーにアイボリーは溜息を吐く。ゆっくりと立ち上がり，窓を開ける。

「鍵は，ね。まさか，あの魔術式を全部無効化したのか？」

「いえ？　《無音》の魔術を階段に掛けたあと全部破壊したわ」

その言葉にアイボリーはもう一度溜息を吐いた。
それなりの――ランクにしてＡかＢ＋＋以上の――自動発動する魔術を，壁や床一面に仕掛けてあったのだが“黒姫”には効かなかったらしい。

「――まあ，いいか。で，まさか私の寝込みを襲う為だけに来たわけじゃないだろう？　用件は？」

「む……なんか，詰まらないわね。もっと“凄い”とか“格好良い”とか“結婚したい”無いの？」

「……凄い凄い」

「……言葉が軽いわ。――用件と言っても何時もの，フルリード学園からの準教授として学園に来ないかという申し出。舞踏会への誘い。後，私用」

エボニーがそう言うと，アイボリーがあからさまに蔑むような表情になる。エボニーは『心外ね』と肩を竦めた。

「私用って別に貴女を襲う事じゃないわよ」

「じゃあ，何用なんだ？」

「今日，フルリード学園のＡランク生徒達が近くの森に試験で来るから，一緒にちょっかいだそう，ていうお誘い」

「……君がそんな事してるから，あの物好き学園長が手紙を寄越すんだと思うんだが……。まあ，いいか。退屈していたし，エボニーだけを行かせるとアレだし」

エボニーが嬉しそうに，然し始めからこうなると分かっていたらしく，どちらかと言えば楽しそうに笑う。

そして，不意に真剣な表情になり言った。

「まあ，取り敢えず――――」

アイボリーが不思議そうに首を傾げる。

「――拘束プレイは何時開始されるのかしら？」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1500z/

吸血鬼憚――白姫黒姫物語

2011年12月5日11時48分発行